

仏教文化とメディア

— 仏教音楽（梵唄）として —

研究員 金 永晃

現代におけるメディアとは、新聞、雑誌という記録媒介とテレビ、ラジオ、インターネットなどの電波媒介が存在する。これらのメディアはそれぞれの特徴を生かしながらその情報を伝達手段として活用している。

今回は、仏教文化におけるメディアとして、その表現法を追求するものである。そこには、仏像（仏教彫刻）仏教美術（マンガラ・仏教壁画など）、法要（儀礼）、仏教音楽（声明）が根底にある。これらの表現方法は現代も健在している。ここでは、伝統的仏教文化をイメージ表現として仏教音楽の文化的展開を説明した。

まず、これらメディアが存在しなかった時代はどうであったろうか。仏教音楽の媒介として梵唄を取り上げて、仏教信仰と仏教的文化現象を追求する。

この過程でインドから西域を経て中国に伝来した仏教音楽が西域に留まる間、多様な音楽文化を咲かせてその音楽が再度中国に伝わったことである。

ここで注目すべきことは、中国に伝来したインドの仏教音楽が中国式歌詞と旋律が合わない点が挙げられる。そこで改めて中国式仏教音楽として誕生したのである。すなわち、中国に定着した仏教音楽はインドとは異なる中国の仏

教音楽として再誕生したのである。中国の仏教音楽が仏教の発祥地であるインドより、なお華麗なる発展した由縁がここにある。

以上の考察を通じて仏教音楽はインドから中国に伝来した後、新しい中国仏教音楽として変遷を遂げたことがわかる。そしてこのような過程の中で仏教音楽は、またアジア全地域に伝来し地域と環境によって変遷し展開したのである。

なお、興味深いことは中国から伝来した仏教音楽が再び日本的仏教音楽として変遷し発展したことである。仏教音楽研究は、主に伝統音楽を専門とした学者及び仏教学者を中心に研究されてきた。しかし仏教音楽は他の仏教研究に比べて大きい成果は見られない。そこには様々な理由が考えられるが、仏教音楽だけを専門に研究した学者がいなかったことが指摘されている。

次に、宗教は「教理・儀礼」として成立している。教理は信仰の内容として、儀礼は象徴的表相の行為として表れる。「信仰」とはその宗教が持つている信念体系に基づいた観念の内容であり、「儀礼」とは人間の身体に基づく外面的表現の行為である。故に宗教の「思想的側面」が信仰であるならば、儀礼とはそれによる「行為的側面」である。「教理」とは、信仰行為の根本となる悟りを省察して伝達することにより、その共同体を成就させる。その上、「儀礼」とは象徴行為として信仰共同体を成熟させる。

「儀礼」の重要性について、一つには、その社会の同一性を維持する統合機能であること。二つには、その社会構成員が同一信仰行為に参加することによってその社会の道徳的規律を育んでくれる。三つに儀礼は、心性が「聖に到達しようとする動機」を提供してくれる。それによりその社会を浄化する機能を持っている。このような儀礼行為を営む上で最も重要な行為が仏教音楽としてメディア論である。